THE NEWSLETTER OF NISHINOMIYA CITY MUSEUM

# 西宮市立郷土資料館ニュース　第43号

西宮市立郷土資料館　兵庫県西宮市川添町15番26号　〒662-0944　電話 0798-33-1298

## 特別展示「阪神沿線ごあんない—にしのみやの郊外生活—」

俵谷和子（当館学芸員）

### はじめに

平成27年（2015）という年は、さまざまな記念の年である。

本市が市制を布いたのが大正14年（1925）4月1日。本年で90周年を迎えた。

西宮市の誕生を遡ること20年、明治38年（1905）4月12日、阪神電鉄が大阪出入橋—神戸三宮間を開通させた。阪神電鉄の開業は、日本初の都市間電車・郊外電車の誕生でもあった。それから110年目を迎えた本年に、阪神沿線に所在する美術館・博物館等7館が合同で「阪神沿線文化の110年」展を開催する運びとなった。

3月の芦屋市谷崎潤一郎記念館を皮切りに、神戸BBプラザ美術館・尼崎市総合文化センター・芦屋市立美術博物館・西宮市大谷記念美術館・白鹿記念酒造博物館では、歴史・アート・文化をキーワードにそれぞれの館の特色を活かした展覧会が開催されてきた。当館は、この合同展の最後を飾る歴史展示「阪神沿線ごあんない—にしのみやの郊外生活—」を平成27年7月18日(土)から8月30日(日)まで開催する。

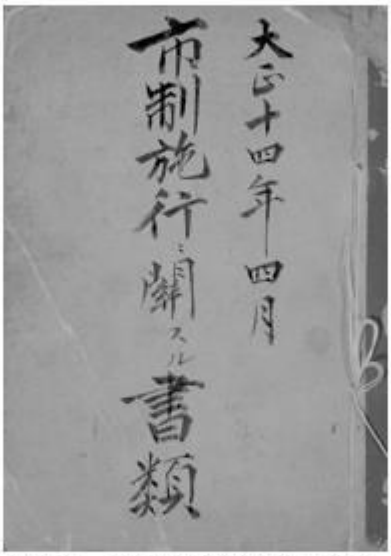


写真1　市制施行ニ関スル書類

### 1．西宮市の誕生

旧西宮町は、西宮神社の門前町・江戸幕府指定の宿駅（町方）、また酒造地帯（浜方）として着実な歩みを進めていた。明治維新後は、武庫郡役所が西宮町のうち鞍掛町に置かれるなど武庫郡の中心的な位置にあった。

人口規模・財政・交通網の整備など市民生活に必要な諸条件を完備したことから、市制調査委員

会を設置。「充分市タル資格ヲ具備スルモノト認ム」との報告書を受け、大正13年（1924）9月4日、内務大臣若槻礼次郎宛意見上申を行い、翌年3月11日付で市制施行許可が告示された。3月31日の町会では当日付で町制を廃止する旨、紅野太郎町長よりあいさつが行われた。

こうして大正14年4月1日、西宮市が誕生。兵庫県内では、神戸市・姫路市・尼崎市・明石市についで5番目の新市誕生となった。当日は、西宮神社社頭で奉告祭と祝賀式が執り行われ、全市をあげた祝賀行事でにぎわった。

その後、昭和8年（1933）に今津町・芝村・大社村を、昭和16年（1941）に甲東村を、昭和17年（1942）に瓦木村を、昭和26年（1951）には塩瀬村・山口村・鳴尾村を合併し、現在の市域が完成したのである。

図1　合併町村区域図（『西宮市史3巻』）

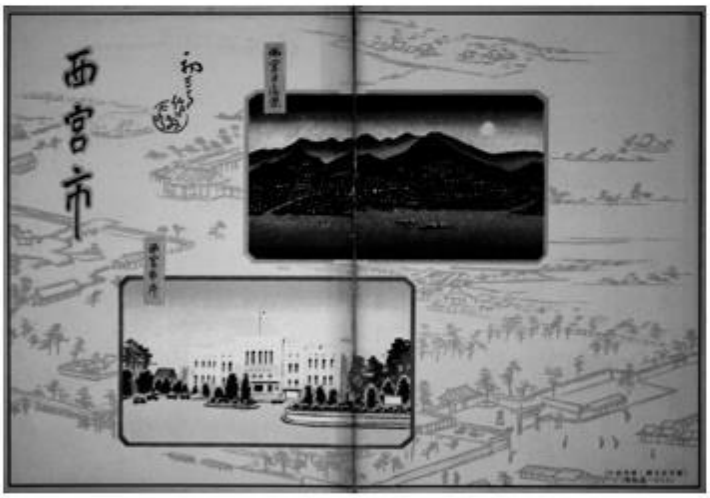



写真2　西宮市鳥瞰図パンフレット（昭和27年）

## 2．阪神電鉄の開業

西宮市の誕生には、阪神電鉄開業が大きく関わっている。

阪神電鉄は、明治26年（1893）、大阪―神戸間の敷設を目指して設立した神阪電気鉄道株式会社から出発した。明治27年（1894）には摂津電気鉄道株式会社に改称し、坂神電気鉄道株式会社との合併を経て、明治32年（1899）阪神電気鉄道株式会社と社名を変更した。

すでに明治7年（1874）、大阪―神戸間には官設鉄道が開設され西宮にも停車場が設けられたが、駅間距離が長く、発着も1日8便と少なかったことから、交通網の整備は時代の要求であった。

阪神電鉄当初の計画は、軌道条例に基づいた設計であったが、技術長として招かれた三崎省三氏の提案による広軌高速電車敷設にむけて、技術面や資金ぐりに外山社長らは奔走することとなる。時代は、日清・日露戦争のさなかである。

かくして、大阪―神戸間を34駅90分で結ぶ郊外電車は、明治38年4月12日開通を迎えた。

電車は振動なくして乗心地よし
電車は美麗をもって賞讃を得たり
電車は米国最新式日本唯一なり
電車は八十人乗のボギー式なり
電車の腰掛けはビロウド張なり
電車の内部は夜間白昼の如し

と開業広告に宣伝したとおりの列車が走行し、人々は驚嘆した[1]。

写真3　開業1周年を迎えた大阪出入橋

写真4　開業1周年を迎えた神戸停車場

### 3. 郊外生活―広がる近代化―

阪神電鉄は、電鉄事業に留まらず、沿線に住宅地を設け、東洋のマンチェスターとも称された大都市大阪や港湾都市神戸に住む富裕のサラリーマン層に、市外への居住をすすめた。殖産興業邁進のため多くの工場が建設された大阪では、煤煙など住民の健康被害が懸念された。そのような中、阪神電鉄は「健康地」というキーワードとともに、郊外への居住と居住地での新しいライフスタイルを提唱した。『市外居住のすゝめ』・『郊外生活』の発刊、沿線に海水浴場や遊園地等娯楽施設の建設、なかでも甲子園周辺の開発は阪神電鉄が社をあげて取り組んだ一大プロジェクトであった。それは、これらの経営が系列会社ではなく、阪神電鉄の直営であったことからも察することができる。

甲子園開発に遡る武庫川改修工事や阪神国道の開設にも、阪神電鉄は深く関わっていた。武庫川の支流であった枝川・申川の廃川跡のうち73.92haの払下げを受け、甲子園球場・甲子園海水浴場・甲子園娯楽場・甲子園南運動場等多くのスポーツ・リクリエーション施設を建設していったのである。

こうした阪神電鉄の沿線開発が、大阪や神戸から人や文化を西宮にもたらすことになり、西宮市の誕生をも促したのである。

写真5　冊子『郊外生活』第2巻8号の表紙

**むすび**

平成27年は当館にとっても記念の年である。昭和60年（1985）7月に開館し、今夏30周年を迎えた。

開館から10年目の平成7年には兵庫県南部地震が発生し、資料館の置かれている西宮市教育文化センターは避難所となった。準備していた開館10周年記念特別展示は新収資料展にかわり、収蔵庫は被災を免れた歴史資料・民俗資料であふれかえった[(2)]。

それから早くも20年。その間入館者数は100万人を超え、平成25年2月18日には登録博物館（歴史博物館）となった。

展覧会では西宮市誕生からの90年を阪神電鉄の沿線開発を軸に振り返える。歴史と文化をテーマに30年運営してきた当館が、次の40周年を目指しあゆみを踏み出す記念の展覧会となる。ぜひ、ご来場いただきたい。

註

（1）大正9年（1920）、箕面有馬電気軌道（のちの阪急電鉄）は大阪梅田―神戸上筒井間を開業した。阪急電鉄も甲東園・仁川などの住宅地や西宮球場（現在の西宮ガーデンズ）などの余暇施設を開設した。

（2）震災時の当館については、「西宮市立郷土資料館ニュース」17号・19号を、登録博物館については同ニュース38号を参照されたい。

# 新収資料「りき祝用一件帳」について

笠井今日子（当館学芸員）

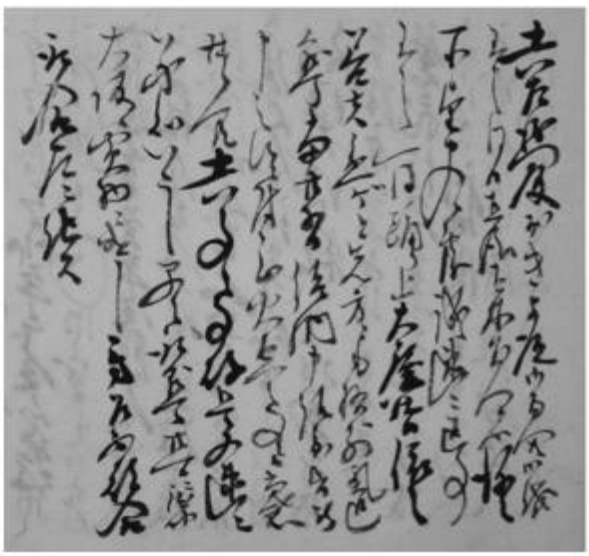
## はじめに

今回紹介する平成27年度新収資料は、「りき祝用一件帳」と名付けられた簿冊で、「りき」という女性の婚礼に関する記録である。寸法は縦12.5センチ、横34.2センチで、横帳という形態に分類される。その内容は、嘉永7年（1854）3月に持ち上がった縁談の経緯に始まり、同6月の結納、安政2年（1855）3月の入家（入籍）とそれに伴う挨拶回りなどの様子、贈答の記録、さらに妊娠5ヶ月目を迎えたりきの帯祝いの祝儀に及ぶ。本稿では資料中の記述をもとに、「りき祝用一件帳」を少しだけ読み解いていきたい。

【写真１】表紙

## 1．りきの縁談

はじめに冒頭の「縁談手続書」から、りきの結婚相手が「西宮辰馬吉左衛門」の子「繁蔵」だったことが分かる。りきの義父となる辰馬吉左衛門は、清酒「白鹿」の醸造で知られる西宮の酒造家、辰馬家の当主であった。繁蔵との縁談がまとまった時、りきの実家では「一同踊り上大慶」したと記されており、この結婚が大変な喜びをもって迎えられたことがうかがえる。



【写真２】「縁談手続書」（部分）

4行目に「一同踊り上大慶仕候」とあり、辰馬家との縁談が決まった時の喜びが記されている。

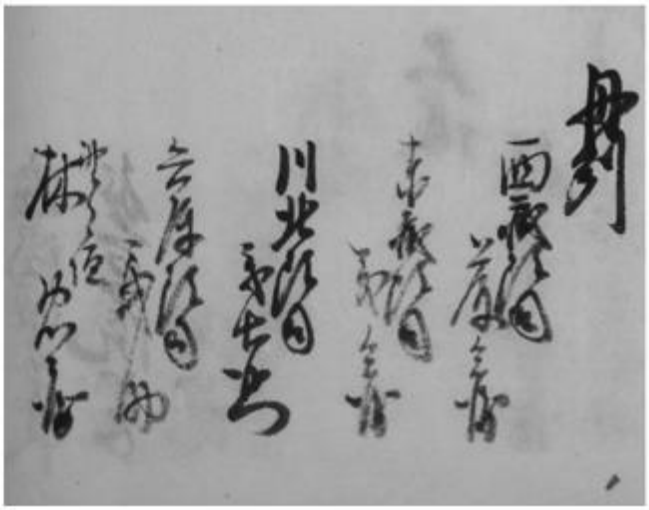
なお、りきの縁談は、6月20日に見合いをした後、25日には結納を行うという早さで進んだ。「火急之事ニ而当惑仕」（7行目）という記述に利助の戸惑いが表れている。しかし、「吉事之事」（8行目）であるため気持ちを切り換え、21日には早速大坂へ買い物に出かけたようだ。資料中に出てくる祝儀の品々には、この時購入したものも含まれているだろうか。

## 2. りきの実家「材木屋」

つぎに、りきの実家がどのような家であったのかを考えてみたい。まず裏表紙の記述から、簿冊の作成者が「材木屋利助」という人物だと分かる。彼は材木屋の当主であり、りきの保護者であると考えられる。加えて、入籍に伴う荷物受領書に「河東利助」という署名がみられることから、りきの実家は「河東」という苗字を名乗っていたようだ。さらに、祝儀の蒸物（赤飯）を振舞った地域に関する、「当所」東之町、弓場町、中之町、西之町という表現、そして、中之町にみられる「常順寺」、「西方寺」という寺院名から、りきの出身地が御影村であったことが推測されるのである。

これらの情報を手掛かりとして文献に当たったところ、辰馬家一族として「御影の河東家」を紹介する記事をみつけた[(1)]。それによると、河東家は清酒「白鶴」を醸造する嘉納家に勤めながら、自家でも酒造業を営む家であり、その二代目当主利助の娘りきの婿養子として、辰馬家から繁蔵が迎えられたという。つまり、「りき祝用一件帳」を作成した材木屋利助は、りきの父親であり酒造家河東家の当主であった[(2)]。なお、婿入りした繁蔵は、その後三代目利助を襲名したようだ。

ここでもう一度資料に戻ると、利助の「召遣」に「頭司四人」とある点が注目される。「頭司」（とうじ）は醸造の責任者を指す杜氏と同義であり、材木屋（河東家）が自家における酒造業のために4人の杜氏を抱えていたことが分かる。さらに、贈答記録の丹波の項目には、西蔵、東蔵、川北、兵庫を冠する杜氏4名の名前が現れる。これらは、繁蔵が持参した入籍土産の贈り先として、りきの親族以外で筆頭に記された名前と一致する。ここから、りきの結婚当時、材木屋が丹波杜氏を雇い、4つの蔵を経営していたことが推測されるのである。



【写真３】丹波の「頭司」

りき結婚のお祝いとして配られた赤飯の贈り先に、丹波「頭司」4名の名前がみられる。それぞれ、「西蔵」「東蔵」「川北」「兵庫」という酒蔵を任されていたようだ。

灘地域における丹波杜氏の雇用は、19世紀初めから増加、天保以降（1830年～）重要な位置を占めるようになる。明治19年（1886）には、灘東郷における蔵人の7割が丹波出身だった（註３参照）。

## 3. りきの結婚がもたらしたもの

さて最後に、幕末から明治期の灘地域における酒造業の状況を確認しておきたい[(3)]。文化・文政期に発展した灘目（東郷、中郷、西郷）の酒造業にとって、幕末期は後退の時期といえる。それとは対照的に飛躍的な発展をみせたのが、西宮と今津の酒造業だった。それは、天保11年（1840）に発見されたという「宮水」に大きく起因する。ところが、天保3年（1832）と明治元年（1868）の御影村における酒造業の経営規模を比較すると、全体的に伸び悩む中で、材木屋利助の躍進が目立つ。

ここからは推測によらざるを得ないが、材木屋躍進の背景には、りきと繁蔵の婚姻による、宮水の地西宮の酒造家辰馬家との関係構築があったのではないだろうか。少なくとも、繁蔵は婿入りに際して廻船1艘を持参したというので、この結婚を契機として、材木屋の経営規模が拡大したことは充分に考えられる。

以上の事情を踏まえて冒頭「縁談手続書」を読むと、この縁談がまとまった時の喜びの大きさが、一層感じられるのである。

## むすび

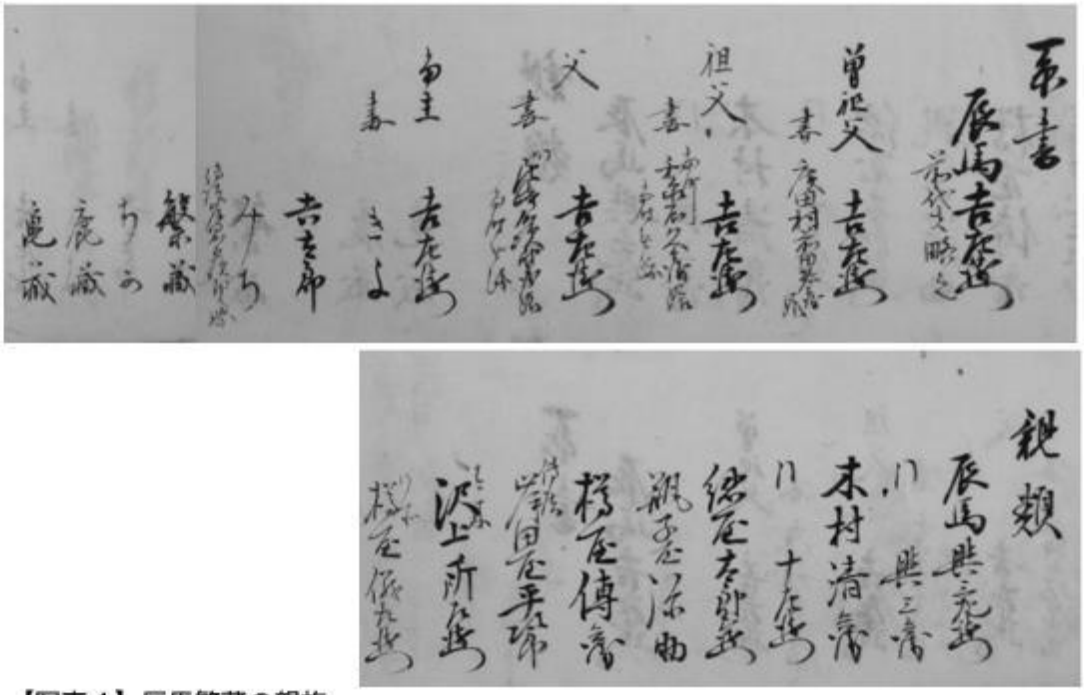
このように、平成27年度新収資料「りき祝用一件帳」には、酒造家である西宮辰馬吉左衛門家と御影村材木屋（河東）利助家の繋がりの端緒が記録されている。また資料中には、両家の関係者として灘地域や大坂の酒造家の名もみられる。西宮の発展に寄与した辰馬家が、婚姻を通じて各地の酒造家と関係を深めていった様子がうかがえる好資料だといえる。

註

（1）辰馬本家酒造株式会社編『第十三代辰馬吉左衛門翁を顧みて』（辰馬本家酒造株式会社、1975年）。

（2）利助が勤めていた嘉納家は、「菊正宗」を製造する嘉納本家の分家で、「白嘉納屋」と称される。御影村最大の酒造家である嘉納一族は、創業当初「材木屋」を名乗っていたが、天明期における江戸積酒造業への専業化を契機として、「嘉納屋」と屋号を改めた。河東利助家は嘉納家の別家筋に当たることから、創業時の屋号「材木屋」を名乗っていたと考えられる（註３参照）。

（3）新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史』歴史編Ⅲ　近世（神戸市、1992年）。



【写真４】辰馬繁蔵の親族

材木屋（河東家）に婿入りした繁蔵は、辰馬家10目代当主吉左衛門と妻きよの間に生まれた。兄弟には、11代目辰馬吉左衛門、門戸村の代官中島家の養子となり家督を継いだ成教（鹿蔵）、南辰馬家の初代喜十郎、北辰馬家を興した悦蔵の妻ちか等がいる。

また親類には、大坂伝法の有力酒造家岸田屋伝兵衛や青木の酒造家沢上所左衛門の名前がみられる。

## 寄贈資料一覧（平成27年3月、敬称略）

石鏃９８点・石匙４点・石斧１９点・尖頭器４点・石製勾玉・石錘・石器６５点・鉄鏃９点・鉄器３点・鉄片２点・土師器４点・須恵器１０点・陶磁器１０点・土錘・土器４点・土器片・円筒埴輪・埴輪棺・平瓦・古鏡・鏡・寛永通宝・古銭・骨器・土面２点・化石４８点・岩石９点（廣瀬彰彦）

ご寄贈ありがとうございました。

目次　CONTENTS

特別展示「阪神沿線ごあんない—にしのみやの郊外生活—」（俵谷和子）…1
新収資料「りき祝用一件帳」について（笠井今日子）…4
寄贈資料一覧…8

西宮市立郷土資料館ニュース第43号　平成27年（2015年）7月18日